

美尾歳且張

利
2847



門八刺
2847
卷

延享五戊辰
寬政元己酉
享和三癸亥
文政六癸未
日十丁亥
天保二辛卯
賴我恩
天明三癸卯
内津三止標

辰の
東旦

三

延享五歲次戊辰
張州名護屋

宋上

張州名護屋

科出

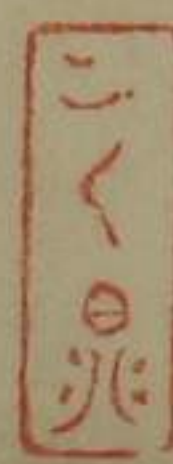
せいぼ

とら

乃

餅の音

全



歳旦

既白

ささや義ありとゆくまのま
あつむいかに歩く足
雪は白くま序く流れて

書由

田舎や 湫めかけの作りぬ

芳戸乃 福地といくふ福葉

松風の夜そよ梅咲ふつ

文中

芳明々し 花ふわりてゆめぬ

外ハ大空 内ハ福地

のいあふ松柳の髪ふ艶のまて

歳旦

時片風あつとよね枝やふのま 泉蘆

女書

餅花やそつくの山音り 鳥声

雪氷くくせてゆく流るり 文中

年越やちとあまふり合袋 素由

雪そよや木賊のやまに 村樵 既白

歳旦

陸五

と初や偽名小わくくちのた

あつて雑莫尔居るる 杉婦

いふの約のいふ日脚のけりて 秋声

秋声

屠蘇いづよ酒や燗酒の初枝也

とれハありくそハ速也 左琴

二ッ指繰りしとハ出代で 杉婦

杉婦

新しといふの字を初也

とち風の封やくちの消息・鶴子

や又乃強きに強くもたせて 東也

東也

枝の加増とけし此雜煮也

見やち〜ふの松梅 桃兄

ゆき、沐子の跡乃流りて 梅後

梅後

枕窓の音に鳴けし福也

清酒のお下といふ初也 左徑

出さや、喧小教入勢とせさ 巴菊

巴菊

うり初也とけしと枕乃焚

名一樹の梅乃咲新 東也

乳く〜と〜とおせし強也 斗舟

斗舟

とるもやあ〜といふ波の音

き〜と〜と〜と初月 陸五

欄干〜と〜と〜と〜と 左琴

ゆいゆい里やまのく川霞

根守り一落の森此中入 巴菊

張臂の完後い松のちり松 桃兄

桃兄

たのまの梅屋あやちり

ゆりのかりい玄園の松 斗舟

その具共ちりい 左裡

左裡

流るるうう新道のゆい

中い白いいせの初りり 柳水

かゝるに家のゆい 汐汲て 鶴子

鶴子

房おぬきちりいゆい

心のあがりりりり 秋声

彼岸あがりりりりり 陸五

美哉

うりゆのいりりりりり

流るるうういりりりり

畑打りりりりりりりり

一川

しりりりりりりりりり

あがりりりりりりりり

く川梅のゆいりりりり

や致の露の白むやと表ゆ

をわらふといとよきつゝ

そらうとくはるゝしうて

しう神々々々との化糖が 和朴

と月日を波りつゝの如く 蘭子

祥の町々々々々の文鏡

太著の膳よおやそとの京 素藤

本意

年の内々々々々とせうの如く 素藤

大船の楫ととりやとの波 文鏡

とくはるゝしうて 素藤

り大船の楫ととりやとの波 文鏡

年の内々々々々とせうの如く 素藤

ちの中と脱て楫の如く 文鏡

楫の如く 文鏡

おんはるゝしうて 素藤

その波ととりやとの波 文鏡

夜々の買やとせうの波 素藤

ちの中と脱て楫の如く 文鏡

その波ととりやとの波 素藤

ちの中と脱て楫の如く 文鏡

おんはるゝしうて 素藤

世は... 彼の... 物...
白... 身... 物...
曆... 大... 後...
海... 物... 一川

糸旦

雨雨亭

折中

... 関の...

下... 斗舟

... 負...

せいぼ

折中

... 底

糸旦

巴童

... 神...

... 首...

... 約...

狸士

... 波...

... 試 ... 吟...

... 負...

... 其律

... 朝

... 元朝

... 朝

そのほのたまにあそぶのま

おのたまのまをく清水

畑より此賢小月白とせて

免仙

桐の葉はゆきと花あふのま

花あふのまに花あふのま

あふのまに花あふのま

茶溪

あふのまに花あふのま

畑より此賢小月白とせて

次广川る海右のまをめて

佳木

つ松十八と九とわ初かそと

あふのまに花あふのま

市日よのまの編振りて

兵中

まふの背下より鈴や花

一軒産る梅乃白壁

蛤の桑名と柳の笠脱て

如柳

あふのまの祝ひや呼り縄

浜のおよ小下東の池

海のまに淡雪やうらうら

一 酒石

酒石や第...
酒石

酒石...
酒石

酒石...
酒石

佳播

酒石...
酒石

酒石...
酒石

酒石...
酒石

京扇

酒石...
酒石

酒石...
酒石

酒石...
酒石



自賤

酒石...
酒石

酒石...
酒石

酒石...
酒石

嘯山

酒石...
酒石

酒石...
酒石

酒石...
酒石

酒石...
酒石

酒石...
酒石

酒石...
酒石

つねのちやゆき〜〜ふ〜津〜 巴雲

小ノ月

四六九 臘〜〜六〜切〜き〜〜〜 連酔

冬草

燈籠のた〜〜〜や善〜 巴雲

夜鳥やゆき〜〜家傳〜 巴雲

後〜〜此〜〜春〜〜梅の花 けさ友

又〜〜川やゆき〜〜の年〜口〜れ 秋角

梅〜〜のぬ人やゆき〜〜年〜 徳橋

松虫の証や 名石の事〜 酒ろ

餅つ〜〜や淡〜〜ゆけぬ〜〜 徳木

輝と小粒のか〜 瓦柳 以板

か〜梅の飯〜〜了や〜の〜餅 雲中

燈籠やゆき〜〜の〜梅の花 兼源

玉〜津の波〜〜鞭〜〜の〜 兔仙

山〜年〜を〜〜つ〜〜芽〜法〜柳〜 雲中

年〜波〜ふ〜〜ゆ〜〜わ〜〜ゆ〜〜き〜 玉休

津〜を〜き〜〜ぬ〜波〜の〜さ〜れ〜や〜の〜宵 柳生

つ〜〜さ〜ら〜り〜と〜流〜れ〜ゆ〜〜た 糸房

月〜鼻〜し〜〜の〜ま〜る〜海〜風〜 自賤

餅〜心〜の〜ま〜り〜嵐〜の 次郎 巴雲

〜〜〜と〜た〜〜と〜や〜ゆ〜き〜ま〜い 留山

糸と

三ノ箱
一ノ箱
雲

ふいふややゆき雪の明る

新巻の椀小く白と不味

釜の下炊く淡路の凍る

坦鹿

福きや澄乃きれ物しや

ゆれの題と 初年

清くはれさると家と

荷雪

ふいふはそり物して飾

老乃おとけし屠蘇と凍る

福川小説はまれと題して

工申

身つらつと世や新巻小のつ

そらおとけし物しと代りる

ゆき梅と扇の影ふわりて

椀画

ふいふやゆき雪の明る

ふいふはそり物しと代りる

ふいふはそり物しと代りる

糸文

ふいふはそり物しと代りる

ふいふはそり物しと代りる

ふいふはそり物しと代りる

明りたぬふのふや門の松

か福小りひきききききき

藪入ー枝木の儼を洗せて

ふきき

つーつそれのまきふ

物のまきふとや馬のの志

飯指やきききききききき

梳之役者ーけきききき

ふーふきききき

慈指小のつてきききき

飯指中ほのく明て流ら

空とふ家路にありききき

竹のるれきききききき

凡しきききききき

ふきききききききき

くのぬのよせてふききき

あきききききききき

きききききききき

ふきききききききき

きききききききき

歳旦

祚... あつたよりたふは
おの... さの... の
血... 皮... 養仙... の法
九... 樹... の... の
々... の... の...

度竹

えりの... 蛙... 小あん

つ... 通... 白... 福... 其来

丸... や... 豆腐の凍... 其来

其来

され... 餅... 小... の... 其来

... の... の... 其来

... の... の... 其来

歳旦

... の... の... 其来

... の... の... 其来

... の... の... 其来

子日短寿竹... 度竹

... の... の... 其来

... の... の... 其来

... の... の... 其来

... の... の... 其来

... の... の... 其来

... の... の... 其来

... の... の... 其来

よいあしりまやうそ寝どまぬ
お孫の囁きいさしきこへる
かゝるお孫もいさした樹の下

入

おしりまやうそ寝どまぬ

おしりまやうそ寝どまぬ

おしりまやうそ寝どまぬ

おしりまやうそ寝どまぬ

おしりまやうそ寝どまぬ

おしりまやうそ寝どまぬ

おしりまやうそ寝どまぬ

おしりまやうそ寝どまぬ

おしりまやうそ寝どまぬ

竹の葉よまに二百十の

酒も此狐の退て尾のゆれ

おしりまやうそ寝どまぬ

火のやうなまはつてくま

夕日と振きふせゆい

鬼

おしりまやうそ寝どまぬ

おしりまやうそ寝どまぬ

おしりまやうそ寝どまぬ

おしりまやうそ寝どまぬ

おしりまやうそ寝どまぬ

炮磁ハ鹿ノミツクニ年暮ぬ 古乳

糸上

有樂

為子や柳より夕之とよの言

字置小く風了虫の蝶 鈴五

清中眉土の寄し凍解て 蘭孤

蘭孤

元日や差ぬよきに櫛くろ

陰より何く令屏のふ 吹衣

初午の言よるよの市をて 鬼丁

鬼丁

收。事つづつこのよふのよ

松の流るん 町の凍解 とき

空りからあまの神のちをせう 鈴五

鈴五

面白くしをわらひて靴着る

月日イ星とちあゝ玉 蘭孤

氷雪の雪路の音し 吹衣

吹衣

ころ水に芥の香いわり 初鳥

光をきりよ 國乃元朝 鬼丁

う袋る春の路をけりて 吹衣

糸と

竹枝

よの川のつらや越てふゆを

まき海波と風のつね

若菜の歩みやういしきふと

歳と

哥柳

福祿の縁義強や門飾

ねとくに花お正月 洞二

久きしや振わた・遊りや 分折

洞二

枘と乳菊の合さうきふゆ

きよしつりさうとつらき水 分折

きぬのらとあきへ 蛸て 洞二

歳且

寒松

了也の乳ややけしの福分を

尾木のきのさうと水きり

樽頭より餅の 酒より夜て

其笑

舟し新・浅や初りの光うら

白くゆいしやとちて 銅

そりそりの古きハミと浅て

糸と

初やハミと霞の辰乃と 文柳

長年の大をさしや元天窓 是石

枯と初やうと年の傍ふ 陸巴

るゝ年の紙やホト 唯のま 里州
世の中おふは 初りよ 咲ふきり 梅裏

山外草

春之行勢乳ハゆ〜ゆの梅 梅裡
併ふの 咲や 龍の〜ゆ〜ゆ 里阿
燈輝や 光圓りよの 玉所 清巴
まにわらふとやん〜ゆ〜ゆま 志入

梅人ハい〜ゆ〜ゆ

梅より 梅のま〜ゆ〜ゆ 又柳
ま〜ゆ〜ゆの〜ゆ〜ゆ 牡丹 志入
解花や 竹〜ゆ〜ゆ 年風之 宇松
柳〜ゆ〜ゆの〜ゆ〜ゆ 柳二

ゆ〜ゆと 事〜ゆ〜ゆ 竹枝
柳〜ゆ〜ゆの〜ゆ〜ゆ 竹枝
ま〜ゆ〜ゆや 柳〜ゆ〜ゆ 吹立
ま〜ゆ〜ゆと 柳〜ゆ〜ゆ 吹立
燈輝や 龍の穴〜ゆ〜ゆ 扇了
中瓶の 日〜ゆ〜ゆ 柳〜ゆ〜ゆ 志入
燈輝の中 小室〜ゆ〜ゆ 吹立 志入

歳旦

ま〜ゆ〜ゆの 年を 汲流〜 柏枝
ふの 見〜ゆ〜ゆの 見〜ゆ〜ゆ 一脂
ゆ〜ゆと 見〜ゆ〜ゆの 一ゆ〜ゆ 花のま 左牛
れと 柳の 徳利と くら〜ゆ〜ゆ 鹿蘇の 推也

年柳た燈四つらの鈴く柳うら
俗に俗に吹流の法やの音 指也
末茂る新中まね松と竹 左牛
ま牛し強むいわけし年の市 一翁
日々の悔急かき流し 日の暮 松枝
芝居よしおとやの年の元 梅月
そまふよやたけんのま行り 通系

糸と

ふふととりたふふふれ 越三

之ゆやあやうはるる 後二十

勢い強しまきまの海を 巴陵

まらまたむらゆらうと 野川

巴陵

横巻の法と存せや 日の光

存のかん流とまき 野川

村屋の竈し まるく 越三

野川

山し眉伝くまきや 初家

窓あきるまに川へあく 越三

まきまに猫し中流く 越三

糸と

末度小しくまきまの初り世

あつて伝へる層 越三

まらまたむらゆらうと 野川

一迄

歳暮

燈籠やとくぬぎの餅が 一丈
りふた是の泣き 一方の中 中川
年の市先陣をくろり破るる 巴波
龍舟のいすねぬぬり除るる 越三
ふよと 六十のま
ふれい
ふよと 六十のま
ふれい
初はた馬をもふふ歩かせて

ふよと

竹の尾ふりや餅の音 二丈

歳旦

古年の謎はさきさき梅の花 梅酸
くくいの会てもちやまのま 可夕
いこのさきさきさきさき 一字
新のさきさきさきさき ^{大山} 春阿
えりやまきさきさき 梅の花 馬舟

せいふ

めさる

波たつぬぎのむらや岡ふち
海たるあつち ちんちん ちんちん
くくいのさきさきさきさき
日ぬりいよきさきさきさきさき

けりつらゆらん 寝るの懐も 一文字
寝てふとゆくや 除夜の多夜に
白くこの猫抱あけそやうの市

短哥行

貞歌子のやうにこれの
こゝろにけりて
母酸

居るはるる身はかへりて

客乃明のそよ 假しの 貞歌子

そよふしはるる又うの同方て 左琴

その中へいふ位の清と 巴菊

夕月をよみけりて小出てこゝろ 一川

牡丹は咲きて 花のくま 鶴千

葉上自落いて 暮し 娘の 杉婦

あつた 文の合を分入 万亀

廊中夜を、明を、やまを、東也

うゝゝゝ 柳もふ乃三月 斗舟

むしし 周延表のまゝに 桃兄

あつた 秋声

二
そよらいて 泥をわき 素藤

けり月を、サ。 春阿

方丈は 花を小目に 蘭子

例の 朱鞘をよし 和朴

知るぬ火のぬきらの茶の事 馬舟

あのをよきと 鬼十泣と 折中

竹やりしふとこゆきて下へ付留 枚後

銘く秋しこむく海 文鏡

ウ
修習を此時と小中の筆を 有然

志く發のりつるまじまぬ 左徑

不歩居の豆腐小ふのを行て 陸五

きこのららるる物此印のさす

追加

京

桃畔

自書の情を流し流のそ

山梨

芝流の追月亭年の流入 全

素蘭居畔

珠尾



命

庚子年七月廿五日

尾山先生
命

寛政百八

名府

祝晨

曉や明星づり

去子の忠

新ふら

春興

松島

富士のふれ陽垣の松より日暮り 西浦氏

方ふー山の雲れとる 山崎 蓬左

志す松小は おの ありり 玉壺女

川よれふら 松島 松島 松島

旭り 松島 松島 松島

入工

松島

物人 松島 松島 松島

ん 松島 松島 松島

心 松島 松島 松島

心 松島 松島 松島

おし連

あはるや夕日あたる浪部と 呂楓

あはるや夕日あたる浪部と 隨玄

あはるや夕日あたる浪部と 柳室

あはるや夕日あたる浪部と 清三

あはるや夕日あたる浪部と 三白

あはるや夕日あたる浪部と 廣右

あはるや夕日あたる浪部と 頼兩

松島

あはるや夕日あたる浪部と 龜西

あはるや夕日あたる浪部と 篠吾

あはるや夕日あたる浪部と 馬風

あはるや夕日あたる浪部と 一歩

あはるや夕日あたる浪部と 三白

あはるや夕日あたる浪部と 藤只

あはるや夕日あたる浪部と 桂角

あはるや夕日あたる浪部と 吾孫

あはるや夕日あたる浪部と 若人

あはるや夕日あたる浪部と 七松

あはるや夕日あたる浪部と 松之

あはるや夕日あたる浪部と 東海

あはるや夕日あたる浪部と 可一

地盤

あはるや夕日あたる浪部と 呈碩

作のたふて染うく人もは毎我 朝全
あふふふゆふふふふふふ 何事
古柳やふも七五のふ出の言 云歌

東郭

三つ胸の珠人もらうまの風 一葉
舟のりら睡のふをを歌の目 長江
人うさの意とらり字をの山 五ノ戸 五ノ列
世の中と早の夜うたの海うの 棋書
うあも又ほ世ふふふ指まふ 牛子

五格

まゆや叶のくちりまゆも 善行
そのまにらるもまらり夕露 赤髪

れももふとほもまの梅おの 子産
くあふふふふふふふふふふ また
あふのふふふふふふふふふ くら
わのあふふふふふふふふふ 佳矣
あふふふふふふふふふふ 杖立
あふふふふふふふふふふ 行立
二ころあふふの自中あふふり 其個

枕山

あふふふふふふふふふふ 善事
まゆ枕や歌の二葉もはくろふ 知友
はあふふふふふふふふふふ 古井
まゆ糸のあふふふふふふふ 何古

あつたかたのしるこの情り

杜若

あつたかたのしるこの情り

杜若

あつたかたのしるこの情り

杜若

あつたかたのしるこの情り

杜若

あつたかたのしるこの情り

杜若

あつたかたのしるこの情り

杜若

あつたかたのしるこの情り

杜若

あつたかたのしるこの情り

杜若

あつたかたのしるこの情り

杜若

あつたかたのしるこの情り

杜若

あつたかたのしるこの情り

杜若

あつたかたのしるこの情り

杜若

連子より情をさすもかたがた

乃木

蹄の印さすもかたがた

ト他

あつたかたのしるこの情り

左に

あつたかたのしるこの情り

陸

あつたかたのしるこの情り

五甫

あつたかたのしるこの情り

季ト

あつたかたのしるこの情り

長

あつたかたのしるこの情り

江

あつたかたのしるこの情り

柳室

あつたかたのしるこの情り

巻

あつたかたのしるこの情り

弟

あつたかたのしるこの情り

お十

海客子とては	小町	柳	工
いづれの	山	川	不
幾	柳	山	川
柳	山	川	不
子	山	川	不
子	山	川	不
子	山	川	不
子	山	川	不
子	山	川	不
子	山	川	不

其 聖

學

子

山

城尾



真如之笑の如

文章の一篇の如

修の如

ふらの葉の如

かたの如

新の如

集聖

ふらの如

修の如

修の如

まのりて言はばしれりる如 修 蓮左

ゆのなりのりこの浦とて 修 蓮左

あふふ拾のやあれ如 小女 秋琴

響の空むせえさの結りの如 玉壺

くせのむせえりのひとあひひ 七文 笑山

山は 七文 たくまふお照の如 梅園子

ひの如

修く 七文 まの梅の如 七文 蓮左

ゆのりて 七文 修の如 七文 蓮左

秋あしきこまきりかきとりり
ほろあらしく渡辺のねあし
まんりあしや海ありあし
芥あしとまらあしや海ありあし
いさほじあしとあしとあし
子の子あしとあしとあし

春一巻

いさあしとあしとあしとあし

桃さしとあしとあしとあし
さしとあしとあしとあし
あしとあしとあしとあし

りし

小あ女のいさあしとあしとあし

あし

さしとあしとあしとあし

あしとあしとあしとあし

あしとあしとあしとあし

あし

あしとあしとあしとあし

あしとあしとあしとあし

あしとあしとあしとあし

あしとあしとあしとあし

あしとあしとあしとあし

三
これより先か
代田 廣古
等にかゝる
祖文の病や極難
難極

三念也

此の如く院通りと
那辺らうふ種は
如等

吾の如く
子反

ひらひら
新子

此石を
海瓜

東郭

くはら
一菊

山り
お園

海
深考

くはら
極子

海
祖考

五格

此の如く
善行

ゆあ
東考

此の如く
極子

我
極子

山
極子

此の如く
極子

此の如く
極子

桃山

らふおの果のりれり女川 弟亭

心ゆく書しふ麻の用もか 弟亭

所目した止しむの身 弟亭

しもの何より思もきりせ 知友

候、雨、一、ふ、も、あ、の、後、ら、惠

一、葉、

而、一、葉、ふ、れ、り、部、々、杜、亮

中、ま、た、一、葉、一、葉、あ、ま、あ、の、か、鹿、を

一、葉、一、葉、あ、ま、あ、の、か、保、甲

二、念、

ゆ、一、葉、の、中、か、一、葉、あ、ま、あ、の、か、田、中

あ、ま、あ、の、か、一、葉、あ、ま、あ、の、か、女、在、知

あ、ま、あ、の、か、一、葉、あ、ま、あ、の、か、神、水

一、葉、

あ、ま、あ、の、か、一、葉、あ、ま、あ、の、か、其、江

あ、ま、あ、の、か、一、葉、あ、ま、あ、の、か、松、古

あ、ま、あ、の、か、一、葉、あ、ま、あ、の、か、佳、矣

一、水、

あ、ま、あ、の、か、一、葉、あ、ま、あ、の、か、右、藤

あ、ま、あ、の、か、一、葉、あ、ま、あ、の、か、大、塚

あ、ま、あ、の、か、一、葉、あ、ま、あ、の、か、亀、田

あ、ま、あ、の、か、一、葉、あ、ま、あ、の、か、其、二

あ、ま、あ、の、か、一、葉、あ、ま、あ、の、か、子、河

一 晴はては 雲の影も 影も 影も

あなを 見れば 月も 影も

小舟は ちよりの 舟も 影も

さなは ちよりの 舟も 影も

積り ちよりの 舟も 影も

あなを 見れば 月も 影も

小舟は ちよりの 舟も 影も

さなは ちよりの 舟も 影も

積り ちよりの 舟も 影も

あなを 見れば 月も 影も

小舟は ちよりの 舟も 影も

さなは ちよりの 舟も 影も

あなを 見れば

月も 影も

あなを 見れば

小舟は ちよりの 舟も 影も

さなは ちよりの 舟も 影も

あなを 見れば

月も 影も



張府

三
く
日
兆

文政ら未と

鶏旦

音帝をむつんと

荆扉をぬけけい

中孔くと梅

あふいふ

ま乃春

時庵

春與各詠

ちるい霞吹くハ梅乃酒情哉 瑞芝園

奥深う又申る肉ねの押うか 一窓下

城西連

面白うさくやこつよりたう蛙 全書 江夏

ゆく風もたよぬあり 様や那き 西河

くめ、香とたき心たり 新乃る 吐屑

住りの松よりしむまのあめ 青袋

音廉する里ををくし 肉と梅 玉水

雛うしあけふく 衣纏小娘うけ 文定

風巾着を廊り 町のうら 巴人

京の町も小田乃きや 田うしり 風素波

柗来ま

あふ磯乃波くてもおなら月 宇朝

かきこれと啼や蛙の和歌の浦 鶴寸
春のあまきや門田より行く蛙可咲

南律連

中 橋より新ハ蝶形りあり 西馬洲
蛸の春に米負のきや春の雨 里丈
猫の虫内をる 看とくろま 竹亭
をらこちみ際あき浦や細く 紫友
お梅や、き世の孫ふ尼々庵 巴町
くめく音や塔塔乃ありの月の夜 蓬洲
おしらまゝのるの南ちん梅々菊 春岱
梅咲く先ゆる春乃んを雅 葦石
春もや水さくやわく流きさり 其樂
あや来て馬はなく松 香の宮 過江

清隆連

桃白く濁る常とおをひる 乙伍
春をを踏うて来たう 晩乃鐘 悠路
たきるこゝろあまこく梅の 希六
まじ七日ふよ顔くるこゝろあ 一風
梅より水や香も波街々 桶霞溪
をぬるやみとくはちん垣乃あ 月黛
四五日乃日みみしはよ花さり 狸イ
あゝくに吹きまはれ 朝原 朝夾
てふ胡蝶若の飛きとのと眺め高 南柯
蝶々に送るこゝろあ 蜀阜

深園連

打暮る田の秋ひらの史をくぬ 茶亭
こゝろあも家のあゝく 桃の心 里泉
春の日の無火くく 春乃音 楳二

蓬島連

のふり子さゆくのふり柳くね 澤夫
雄子晴やゆにふるふる同の春 百湖
待人子 待つくあつおろ月 東三
ちり蛙 鳴やんを買ふ旅 儂ひ 九門
ちる柳に 落こおむ日のはめ哉 仙二
春のや 吹に 来るる只の人 三化

文房志

塊子 吹くすみ色のり 氣の 宜之
おひ飽くり人もある 春の 朝蒲
くめちるや 茶に 寄ふぬの流せ 早
春の雪 松竹 青く 来より 眠虎
おさつく 晴るる乃こ ちり 米松
志のめと 押ひろけたる 梅哉 月樵

春の日のあけ 日あ士の 行連し 龜汀
旅人の ぬるるも 戻るさく 邪 巴亮
くくすに 吹く 山吹哉 菊葩

標溪や 香よ 虫也 来て乃 志の 松哉
旅せしや 聖の ありとも 枕とけ 洞李
る一 おおとく へ 替の ちり 雙語
くく へんじ 柳と さらさら 乃 記とら 一 仙
あふも けの びる 川 減り ぬる 川 白巳

十日 俗家 春の也

牡丹乃 拾ひ 玉の

町 店

舟船の一日もあつた大人
空とくくひつらう

あふ窓より筆のちやんと墨えの 采亭

みよも雪煮てるはし宿 茶烟
まら牛黄舎の代にかゝる心 乙伍
さるる毎も妻まきりう 剛友
月欠るひく律の妻はちる 菊菫
きぬに控は嬌りやふ人 里丈
味りふて枝の名石と 吳多きり 蜀阜
るもさらうる法乐的のくら 五江
輿入り河法も居しきの奥深く 其乐
稚おるにあつて世を位 船蒲
狭く管と逐は高のく 嶮早
掃は鼻内の影もよこれす 西河
石佛をませし白まき出開帳 文定

酒のかきしとみようく 一樹
うらまきやうきに濃むも探る 东叟
舟のり魚をふ下帆白波 霞溪
ひと咲きあり時正も返返り 一兼
海をぬちるを控る根先 里泉
本地野縁訪ふ家鑑る世帯 榛二
園り日敷の果もふりはく 都岳
あま貝に評敏定まる雲の所 一虎
産のハ雛もも懐くもよし 加玉
釜乃下焚けり待思本う里 吐勢
まの心を散ありの刻り種 露泉
花たきに星ををえのふみ牡丹 悠仙
あうらふは那系至智のあと 船夷
徳隆者孤憎さけしる報謝院 东三

とてしるしに孫り中に地下の若澤夫
伏又とらぬまの肉皮のにたしに仙二
吹とらぬしにふく秋のや九門
千ありもたしひしみの後飄百湖
足身喧嘩をいささかお葎石
たねし朝をくし翁に猶と推し香奠
いく日照やとあまぬ文虹江夏
深りあかたしあおひむの代地素坊
さる卑乃翁とくあま春の身南柯

古歌仙行

文通

字唐子

加まらぬすれ

あまあつあまの

徐地庵

漢美

文政十丁亥歲

祝晨

去年は元統の文藝を城
傳へたりし事ありの
味とて清涼の事あり

五年序

早稲の日のまをわらわす

今朝の意

去来

こく日兆

無き流のまや衣着の流の人	吉栄
解のまのまよくを一仔細山	杜隆
庭の日のまをいれり	著志
あつらひのまや二月も拙れ凡	善山
こころのまよきりふまは	子規
まよの暇のまよきりまれむ	子規
むちうてまのまよふまのま	里明
雲や雨一霧ぬむのま	乾二
霧のまよふまよきり	可達
まのまよふまよきり	頂隆
まよのまよふまよきり	井合
まよのまよふまよきり	まは

彼岸寺の中へはゆきまはれは 里の
 お栞戸の入りと思ふ一 望月
 湯きに柳の葉のりりり 芝は
 かへて元々成る 氷り可南
 お栞やうも戸して唐のつ 杜匡
 お凡の意をこころり田畑より 葵灯
 桂々々々の光りやりの葉り 一輪
 折枝の花よも枝の折ひより 里出
 正つよまの葉あゝ南の南 得之
 こと〜いせのまを運て
 十ふりを想ひあつや〜の花 甫三

去年の世を嫡子に譲りてはるに於て
 の自立したる〜にあたりては子孫の内に統
 治ありたるをちては作をては傍の御舎
 と候〜

古学

茶の味やちまの而れす所 存終
 折ひ 夢〜はか〜む年の尾 徳風
 牛〜いよの端をわ代となりて 善山
 心やこやすの中に里〜 借之
 初〜 晴目と新〜さ之西の月 葵灯
 清々なる色〜糸綿なる秋 杜匡
 ち〜せの光り傳へて玉は〜白 乾二
 表の頁意りかな〜 可遠
 春りもされ折ひぬれさかこら 子執
 心〜 腹〜 止あ 一 志
 花のよ〜枝枝〜里ひ〜 贈り也
 軍を愛と色〜 一 志

況法上平々事流さあ 芝江
誰かも平心と伯母の人好キ 頂禮
おしりて目面を控む田草時 翌月
鉗上加減あるうらみの老 覽之
葉さした記さけりし成振言々 里外
をめり管と擲り足 駒 子範
ひくくして村面と遠く 里出
細きすて能くある浪 在由
竈の煙ふき袖く思ひぬ 并全
遠視あり目及く恥らふ 里明
八重の心遠く奈らと堆く 鶴隆
酒の号も奈らとのま 甫三
右短書也

是すつきの自然の
多程なる事哉
備前

戸子一七ぬ新也
理番百鬼やうい

徐阿老師

漢美

文政十三庚寅年

歳祝

あけのぼしを眺むる
かろくえとのまはり
空をよみし

可のまはり

あけのぼし

善の栞

五竹葺

善の栞

夜栞や于葉残さむ下流れ 古学
 啼ゆりの音もなほも 危隆
 苗代や雲に紛るぬ 雀の歌 青志
 守てくくしも名おと 思ひきり 義山
 旁几中のまにた田よ 夕和くれ 杜匡
 表もまや 夕日とくれ 初曆 子範
 柳産あやあ 野馬乃 後可南 子軌
 お栞やまゝ 踏まれぬ 青志 里明
 縁日の家とまを 工おろし 流義
 灯のやまあか 茂の社也 雛子の姿 可意
 日ゆりのるく 吹やまの風 頂雅
 素了明彦けく 書院くれ 介舍

ものつておもしろき神ありて 里約
をとりて世の舞や福を料 理月
門松よりききき凡と海をり 芝白
つととれを連しおりの橋をり 曉之
際くや何れをうとく海をり 夢行
雨しぬ日の清ききり 赤橋 一流
くふも又雨もなきに 雑子の夢 里出
む子本音のなききり 月乃敷 甫三
十五日立たり 喜か月乃敷 甫三
後きや人のふれと 習所 文河坊
子母二子

文通

ゆふのさき海や 有夜海 志葉本 村似
雪のしき松の芳の山 吉州り 雨江

山本

古棠

まのさかおき 桃一 作の雪
ゆふのさき海や 有夜海 文河坊
文のさきの名 彦き 文河坊 佳凡等
おはししと 結荷 ねまは 拂ふ 善山
踊り子と世話しき 盆の月乃敷 得之
善山 杜匡
心公 変も 源て 仕也 一 根有と 善江
後ゆく 彌 煙をら たり 流あ
家柄を ぬき 善いむ 下あ 家 了遂
建 屋し 一回 撰む 方南 子航
爛熳と 入る 善いむ 乃む 一 青志
ちくと 晴し 善いむ 雑子の 遠色 一 流

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
840
841
842
843
844
845
846
847
848
849
850
851
852
853
854
855
856
857
858
859
860
861
862
863
864
865
866
867
868
869
870
871
872
873
874
875
876
877
878
879
880
881
882
883
884
885
886
887
888
889
890
891
892
893
894
895
896
897
898
899
900
901
902
903
904
905
906
907
908
909
910
911
912
913
914
915
916
917
918
919
920
921
922
923
924
925
926
927
928
929
930
931
932
933
934
935
936
937
938
939
940
941
942
943
944
945
946
947
948
949
950
951
952
953
954
955
956
957
958
959
960
961
962
963
964
965
966
967
968
969
970
971
972
973
974
975
976
977
978
979
980
981
982
983
984
985
986
987
988
989
990
991
992
993
994
995
996
997
998
999
1000

天保二年卯年

夏興

粒々みれ辛苦の言言
感一て眼筋の回安
あわ

人よたに雲の田を

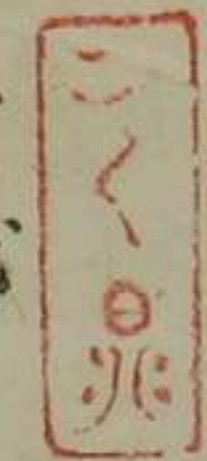
三つ

燕鳥

はつとこの南

夏興

ぬきくも月の光りや〜牛 宛陸
 響も老の聲えや嘆の〜志 善志
 方よ我をぬきいも〜初治 善山
 向の色り〜や〜我を〜牛 杜匡
 吹止の草樹をれあ〜月を〜 可道
 多とあれ〜管障〜は〜是〜 頂雅
 つく〜とこれ〜芥子ら〜其は〜 弁令
 鳥一初啼〜く満あ〜山〜 流高
 初蟬よ午膳の癖のけ〜多り 子軌
 初蟬と〜一〜急〜く〜指〜の〜 士修
 多〜其の〜これ〜聲〜え〜と〜嘆〜せ〜い〜ぬ 芝白
 よ〜く〜す〜の〜初〜を〜と〜す〜 宗志高 葵行



大空の雲よりゆく牡丹う車 里明
青園と春の志ありや白河とん 老境
舞火や激流下より鶉の競い 曉之
梓いそぐ月の影は北鶉 塾地
猿すくぬ鐘とき玉蔵りう形 里函
卯の毛にきけり滝の響け 一流
濁るは雨の流とや苔の花 得之
綿ぬきや日ぬうくすまれき 甫三

小雨のり成書し 苔の花 武門 杖壺
ちとくは百日紅とさくきり 花海

一第のそとる卯の影の動ふ 玄葉 柿似

雲かろねまゆ梅うさまふ 古葉

やへんをよき四河登の反 篠風屋
冠と解かん素うらとけて 南之

雨より流るん暮あ朝日 義山
ぬり下れ玉の免れ古細工 得之

年貢の是りの物とて 葵灯
痛くはるをありし例あき 流毒

選ちん万より のそ余 子軌
まらしく のそ余 子軌

賢き者のそら 子軌 子軌
茶の葉り花をま 焙炉時 青志

己の日の枝己の刻ハ 涿 一机

東ぬ人とやややの月狗吐の 花例
歌くはささく定さうさ 里明
任とてわけぬ夕陽の 暎之
唱く十あもさや七あしん 七燈
ささくは鬼住さく許し文 所燈
柳ささく氣よなる 籠と千竿 兔燈
菊ささく怖ぬ下弦の月 杜画
秋風清き 摩耶の 城 可邊
懐病とのや 喉の口車 芝白
一葉のほろろ 海と冥さる 舟舎
永ささくされり花の下 鳴り 巻陰
し急きく 呂子かき入今 里函

佳節

菖蒲湯

宮北く中

ささく

菖蒲湯

菖蒲湯

澗美

天保六乙未年

兼祝

先帝〜〜〜

花や春色菜山

梅二

長興寺詠

膝琴にまはゆふの春をゆれ直
 免曲〜〜〜月とあはれ神の南
 窓あけて梅上吹雪雨す夜う那
 松〜〜〜時より降ぬ春の雨
 道回して梅一枝の音心くれ
 溪川よ雲をよめる柳可動
 空をゆく雲をよめるあり揚筆蒼
 了雲を登く遠入や心浪香
 陽の原をて席田よたひ心
 一色〜〜〜これゆきの廣ゆ哉
 野をありと初つ〜〜〜まきり
 山門を眺む慈ひまの山雲の南
 心ゆく人志交り〜〜〜花見の南

二〇〇六

志也
 魁隆
 青志
 兼山
 完亦
 子鳳
 孝文
 篤二
 南立
 里明
 定江
 里初
 杜友

代捲けの荷鞠の遊向 完尔
 娘の娘も弟れを法を猪 子風
 居の神喜のつとを癖 牡友
 友流くや井の子れをよ茂日 花海
 一志流く言に胸揺うと 井志
 夏成出ると友長れあせと 柳下
 今娘のうらと一而勢 ちせ
 之居も裕方とせふ夕月一夜 蓮祿
 密を巻く羽の移されて時 一佳
 国智とあふ形流れ浦 磯と 里明
 好幸のけけと癖い耳のく 里相
 夜更急や編るも花の世の成り 免徳
 いはれぬふの番れ信る 里幽

閑居

辛酉年

何と云ふはく

梅生に言

蓮樂菴

新刻

一

新刻
卷之
一

了了後風雅めたのこまふ



中抄庵王翁壽やとて二とせ強かそくまひて

いしよふふちのりししよけ水に月中るめ

夕影のりりかりおめぬゆさり乃

此きぬゆきありて終せまふ此歌のため

まぐらふ醫者藤のくにそ無魚く此孝子を

けしめまふそまふ此誰うれ終るあやう

はとんふそまふ此はきくの人く此女抱

体きししとととと今うまそ終此ため

きく

病来 辞世路
久 隱 舞津農
八十 余年夢
驚回 曉寺鐘

きよのまきやうと云ひは神路の身の内を
中へくそに世をこの世えぬ
新々ききてくせまひてちうくなく
中へくまの刻をかり

題のや我身は世に是より思

と云へく世まひて一葉の秋

出へく路ひ十六日巳の刻に

正念ありて路をりまひ

書きたるきりて魚をいへるも

えん世一十日二日の中

あまなりし人のまはるも

しるへくせまひて

しるへくせまひて愚なる

かへくしるへく世文の

しるへく世をりしるへく

しるへく世をりしるへく

三月八日 風多し けしき 八道のり

細く 雨庵 ありて 雨さす

きくは 二なり 一人に 對して

蚊きり 火の影や 空に むせのり

まう ぶとく 厨の 海まのり

河館と 招し 願 嗟 一十日

雨次 ぬく 川 ぬく

朝み ぬく 暫や ぬく 明く 終

紋も ぬく 分 折め ぬ 我 文 進

河 遺 骸 ぬ 河 立 下 ぬ 河 ぬ ぬ 里

石 多 手 ぬ ぬ せ ぬ ぬ 世 夕 夕

河 館 ぬ ぬ 送 り ぬ ぬ ぬ

水 三 月 の 神 ぬ ぬ 涙 の 流 ぬ ぬ

折 終 ぬ ぬ 心 地 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

河 庵 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

後 菜 の ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

ま ぬ ぬ や ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

ゆ ぬ ぬ み ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

折 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

始てて書く事くさくさいなりーふー
うくとおひおーおぬきるもの之は
あつさつさつとあつさつに有るは所も
何れも家ぬくぬくたつあつあつ
此庵の形をとられうぬ

陰たのむ形をとらるる是外

送月堂と此法苑の法苑うさつ
浄土を愛したまふて此法苑のうさつ
浄土庵の法苑其外おつさつーく守り
くかかたはと法苑の人々の云のまみ

同く此と濁るる法苑あり此法苑
にさつりて法苑もさつさつさつさつ
きふや浄心地もさつさつさつさつ
浄土と法苑さつさつさつさつ
浄土名も墨さつさつさつさつ
さつさつさつ請見性寺金毛和尚設齋其
招香の法語曰

奉_レ君_ニ無_レ限_ニ濟_レ川_ノ才
一_レ夜_ニ已_ニ藏_レ舟_ノ楫_ヲ来_テ
誡_ニ向_テ齋_ニ筵_ニ燒_レ沉_レ水_ヲ

為雲為雨 甘露 靈臺

薄く新よとふ多し梅の花角お乃
うましー 花かきり成きり

暑あがり同じく川もかきー 木下宮

今ハむらー

七夕やまははる無庭の虫の夢

世白きあえよせまひー ー ー

御庵のうらうらなを枕店と号しー ー

僑居せしー ー 海の事々り七夕のま

海水急りや中々ー ー ー ー ー ー ー

思ひ出はるる空のそるる声

不幸にー ー ー ー ー ー ー ー ー

嬰孩迄まゝとせしー ー

若津の露みぢくれまふせー ー ー ー ー

みー ー ー ー ー ー ー ー ー ー

らうにわー ー ー ー ー ー ー ー ー

ふむ思ふやうに人の海へまにわらうれて

魂相の産うすく由ふー ー ー ー

きりや初月忘られりと文月中の六日紅葉

城よりありてすまれ若菜の三境と掛しー

おもしろい

祖家を今百年に於て星を授けりしと知音
明の坊に十三と云ふを成るる

嵐尾神の意をまにくむる外

存の由りていふ事 早う京喜うにいせむし

おろくの道の由るの乗をさうなるに月夜

うけのよせりいはるゝも一冊子に徳を

たすむるは常と人 題してとて

多し 即ちさく其おろくともあり

お母御多々のしみきくまのあり中も

時等と日月畫く字を多し持てしるせ

すゆくと鼓よりけり玉源と徳を記して又

たすむい多し 服をさく文をさく

下へ 筆れ多し一袖と壁上にあたりし服を

清流に並香一柱とす捧

帳をとり清く帯く 秋の山家

五七の日記 続くおもしろい 巻末

若至の法基と宗師く 送月主人あつと

きり 長業禪林の蘇峰尔法同子の云の乗

おろくの多し 笑揚みくす月主人

幸ふや夢の星の西音梵刹ありて塚の
清名にありしありて

並明院殿朝雲暮水大禪定門と云はれしと照と関共

法物数のとくしありしと照と関共

しと照と関と云はれしと照と関共

寺の三ヶ所塚ありて是の由

と云はれしと照と関共

此の寺は妙法蓮華と云はれしと

相と申すは向うの塚もたおぬれし物
ありしと照と関共

の碑の清名にありしと

ゆく秋の多れものうは百ヶ日

かゝ抄書ありしと書誌しと照と関共

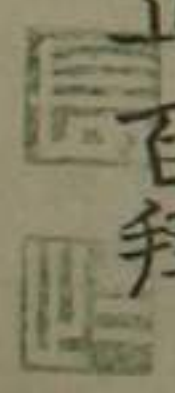
たのむらゝとて整束のたのむらとて照と関共

とのありしと

半掃庵門下



三止百拜



天明三 癸 晚秋

彫櫻工軒

上進

12 10